

2020/02/16

## 「ザアカイから神の愛を学ぶ」

「それからイエスは、エリコに入って、町をお通りになった。ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見る事ができなかった。それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。」(ルカ 19:1-4)

当時の取税人とは、ユダヤ人でありながらローマにこびへつらい、同胞であるユダヤ人からお金をかすめ取る、悪人の代表のような存在です。ですから、人々は取税人を恐れつつもさげすみ、彼らと好んで交わろうとする人はいませんでした。その取税人の親分で、しかも金持ちであったというザアカイは、悪人中の悪人です。彼は、自分が悪人であり、罪深いことを重々認識していました。

そのザアカイが、わざわざ木に登ってまでイエス様を見ようとしたのは、なぜでしょうか。

イエス・キリストを求める人には、二つのパターンがあります。一つは、自分の罪深さを知り、自分には価値がないと思っている人です。このような人々は、主の前にへりくだることができ、イエス様にあこがれを抱きます。つまり、イエス様に救いを求める人たちです。

もう一つは、自分は善人であると自認している人です。当時のイエス様は、まだ迫害されておらず、人々から立派だと認められ、権威をもっていました。こういう人に自分を認めてもらい、自分の立派さ、正しさの証人となってほしくて、キリストを求める人たちもいます。律法学者・パリサイ人がその代表で、現代でも「国会議員と知り合いだ」「芸能人と友だちだ」などと、他人の権威を使って、自分を立派に見せようとする人たちがいますが、それと同じです。

この場所に集まってきた群衆の中でも、自分は立派だと思っている人たちは、ぜひイエス様に自分の家に来てもらいたいと願っていました。ところが、イエス様はなんとザアカイに声をかけられたのです。

「イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。」(ルカ 19:5-6)

ザアカイは、イエス様が自分の家に来ることなど考えもせず、求めてもいませんでしたが、大喜びで木から降りてきた様子から、イエス様を迎え入れたいという願いを持っていたことがわかります。

このことから3つのことを学んでみましょう。

## 1. 人は自分が何を求めているかを知らない

ザアカイは、イエス様を求めていましたが、イエス様に声をかけられるまで、そのことに気づいていませんでした。自分が何を求めているのか、わかっていなかったのです。

「けれども、イエスは答えて言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。」(マタイ 20:22)

現代は心理学が発達し、自分で意識できない潜在意識の部分にこそ、自分の本当の気持ちがあることがわかっています。自分で求めていると思っているものが、本当に欲しいものではないのです。

よく「祈ったのに聞かれない」という声を聞くことがありますが、もしかしたら、自分が求めているものを知らないために、自分が求めているものを祈っていたということがあります。

## 2. 神は心の叫びを聞かれる

聖書に、「『主よ主よ』と言うものが皆救われるのではない。」とありますが、何を求めて神と関わろうとしているのかが問題です。

自分は正しいと思っている人は、神によって自分の正しさを保障してもらうことを求めています。それは、自分の栄光を求めているのであって、神を求めているわけではありません。

一方、罪人は神に救いと助けを求めます。ところが、そのような人々は、なかなか自分から教会に行こうとはしません。そこで神は自ら罪人を探し出しに行かれるのです。

## 3. 神は愛されないものを愛する

人間は、自分にふさわしいものを見つけ、関わろうとしますが、神は、人々から嫌われ、この世で見捨てられたものを探し出して関わってくださいます。これが神の愛の姿です。

ザアカイは、人をだまして金儲けをするような人物であり、見かけはまったく神を愛しているように見えず、愛するとも言いません。パリサイ人はその逆で、立派な行いで、神を愛すると公言しています。しかし、そのパリサイ人は、実のところ神を必要とっておらず、神と関わろうとしていないのです。

神を愛さない人は、実は、神を求め、助けを求めている人です。彼らは、「私みたいに罪深い人間は教会に行く資格はない。」と神を求めることもしません。しかし、このように自分の罪深さを知っている人を神は愛されます。

### ■神の愛を受け取りなさい

「これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた」と言ってつぶやいた。」(ルカ 19:7)

イエス様が町に来ると言うので、大勢の人が出迎えました。日本で言うなら、さしずめ、天皇陛下の訪問に町中の人々が旗を振って出迎えるようなものです。イエス様をおもてなしするのは、どんな名士かと誰もが思っていたところに、なんとザアカイが指名されたため、人々は皆、「もっとふさわしい人がいるだろう。よりによってなんでやくざの組長のような人の家に泊まるんだ？」とつまずきました。

神様は、「自分は神にふさわしい」と思うような人は、神の前にふさわしいとは思われません。むしろ「自分のような罪人は神にふさわしくない」と言う人がふさわしいとされます。イエス様は、「自分を高くする人は低くされ、低くする人は高くされる」と言っておられます。

「ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」(ルカ 19:8)

ザアカイは自分の行いを反省して改めました。ここで大切なことは、ザアカイは悔い改めたから、神に愛されたわけではないということです。神に愛されたから、行いが変わったのです。

人の関わり方は、ふつうその逆です。あなたが悔い改めたら関わるというものです。しかし、神は愛することを先にします。その愛に心を打たれて、人は変わるのです。

確かに、一般的に「悔い改めたら神の国に入ることができる」と教えられています。聖書が教える「悔い改める」とは、原語では「メタノエオー」といい、「神の呼びかけに応答すること」です。まず私たちに差し伸べられている神の愛を無条件に受け取ることが最初であり、それに伴ってまことの悔い改めに導かれるのです。信じることができたなら、人は変わるのです。それは、生涯にわたって軌道修正されていくということです。

「イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」(ルカ 19:9)

「救いがこの家に来た」の「来た」とは、一度限りの出来事を表す表現です。ザアカイは、救われていたと、宣言されました。これこそパリサイ人が望んでいた宣言です。

## ■人の子は失われた人を探して救うために来た

「人の子は、失われた人を探して救うために来たのです。」(ルカ 19:10)

ザアカイの話は、この言葉で締めくくられていますが、このザアカイの記事の少し手前にパリサイ人と取税人の譬えが書かれています。その譬えでイエス様が教えておられたことが、まさにこのザアカイの話に相当するのです。

「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるる者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」(ルカ 18:10-14)

また、イエス様は、この「パリサイ人と取税人」のことを「丈夫な者と病人」としても話されたことがあります。

「そこで、イエスは答えて言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」(ルカ 5:31-32)

イエス様は、神様と罪人との関係を、医者と病人の関係で表し、「私は病人を救うために来た。」「罪人を招いて救うために来た。」と言っておられます。

自分が病気であると意識する人は幸いです。病気であることを自覚すれば、医者が必要とし、医者を求めるようになるからです。自分は健康だという人は、医者に助けを請わず、「自分の友達に医者がある。」と自慢のタネに使うだけです。

自分を救ってほしいと願って医者に関わる人と、自慢のために関わる人とがいます。あなただけではどちらでしょうか。本当に関わるのは病人だとイエス様は言われます。「自分はふさわしくない」と思っている人のところに、神様はわざわざ出向いてくださるのです。「自分はダメだ、愛されない」と思っている人を探して、癒すために関わりを持つ——これが神の愛です。